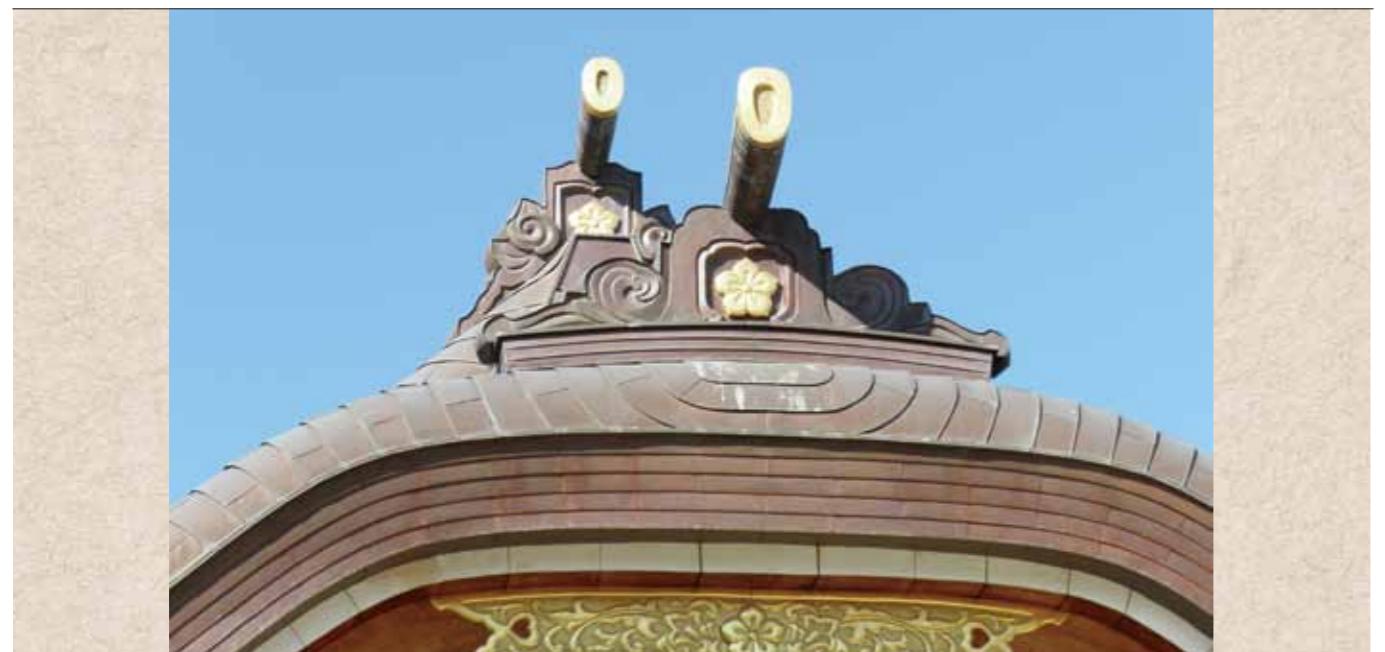


すみ よし れき し りょう かん
住吉歴史資料館だより



ごあいさつ

資料館だより 第4号目次

ごあいさつ
住吉学園理事長
住吉歴史資料館館長
なかじまかしげ
中島慎賀 1ページ

住吉歴史資料館
平成23年度の成果
住吉歴史資料館事業推進委員会
..... 2・3ページ

住吉村誌を読む
鼻高山の手水鉢は一体どこに
神戸大学地域連携センター研究員
住吉歴史資料館専門委員
木村修二 4~6ページ

写真・学校お茶会
平成23年11月6日
住吉歴史資料館事業推進委員会
..... 7・8ページ

東求女塚古墳と
児原処女伝承(2)
神戸文学部非常勤講師
近大姫路大学教育学部専任講師
住吉歴史資料館専門委員
松下正和 9~12ページ

昨年は東日本大震災があり、南海や東南海の地震などが想定される世の中、まことに不安ではあります。阪神大震

住吉は、六甲の山、大阪湾の海を持つ恵まれた環境にあり、京都、大阪に近く、歴史に富むところです。古代の経て現代にいたる住吉にかかる歴史を、整理して、まとめ、住吉の皆様にわかりやすく、楽しくお知らせすることを事業の大きな柱としております。

どうぞ、お気軽に資料館をご利用頂ければと存じます。

昨年、住吉学園理事長に就任致しました。また、住吉学園理事長は住吉歴史資料館の館長を兼ねております。資料館は地道で、皆様に身近なものを運営して行こうと考えております。

第4号

本来「求塚」とあるべきところを「乙女塚」と記されている点が気になります。また『住吉村誌』によれば、古老的言い伝えとして、東求女塚の字が「平塚」「鬼塚」となっています。また『住吉村誌』によれば、「鬼塚」はその東方に大塚の陪塚（主人に従う従者の墓）として別に小さい墓が存在したといわれています。他には宇柳の南部に「影塚」の地名があつたそうです。絵図には描かれてはいないものの、かつて三つに並ぶ塚のうち真ん中の人々は三つ並ぶ塚のうち真ん中の大きな塚を「乙女塚」とみなしていましたために、東求女塚古墳のことを「乙女塚」と呼んでいたのかもしれません。あるいは、『摂津名所図会』で三つの古墳を総称して「処女（乙女塚）」としていることから、東求女塚古墳も「乙女塚」と呼ばれています。かもしません。今となつてもはや明らかではありませんが、東求女塚古墳が江戸時代において菟原処女伝承と密接に関係するものとして明確に認識されていたことは確かでしょう。

次回は、明治時代から現代にいたるまでの東求女塚古墳の様子を紹介したいと思います。

「影塚」の地名があつたそうです。絵図には描かれてはいないものの、かつて三つに並ぶ塚のうち真ん中の大きな塚を「乙女塚」とみなしていましたために、東求女塚古墳のことを「乙女塚」と呼んでいたのかもしれません。あるいは、『摂津名所図会』で三つの古墳を総称して「処女（乙女塚）」としていることから、東求女塚古墳も「乙女塚」と呼ばれています。かもしません。今となつてもはや明らかではありませんが、東求女塚古墳が江戸時代において菟原処女伝承と密接に関係するものとして明確に認識されていたことは確かでしょう。

次回は、明治時代から現代にいたるまでの東求女塚古墳の様子を紹介したいと思います。

住吉歴史資料館ご案内

再発見! 児原住吉、昔を未来へ がコピーです。

開館の目的は、「住吉に住む人々が郷土を理解し、それを子供達に伝え、子供達も郷土に誇りを持ち、ずっと住み続けたいと思うような町にしたい。住吉歴史資料館は文化・歴史的の面からそれをお手伝いする。」ことです。

そのため、以下を行います。

1. 本住吉神社横田宮司家に伝わる古文書の整理。
関係文書、記念物、言い伝えの収集。
2. 展示物のメンテ。
展示室、座敷を使用しての各種展示の企画。
3. やさしい、楽しいイベントを企画して
みんなの地域への理解を深める。
4. 「住吉歴史資料館だより」を通しての広報。
成果の発表。

●住吉歴史資料館の刊行物●

1. 本住吉神社詳説 平成22年5月刊
2. 児原だんじり本 平成13年刊
3. 住吉歴史年表 平成19年刊
4. 住吉歴史資料館だより創刊号 残部僅少
5. 住吉歴史資料館だより第2号
6. 住吉歴史資料館だより第3号
7. 住吉歴史資料館だより第4号
8. 住吉歴史資料館だより臨時増刊
住吉谷の水車展
(平成22年秋イベントの冊子資料)

編集後記

約1年振りの発行となる第4号です。住吉学園幹部の方々が交代となり、新しい理事長さんを戴いています。理事長さんは住吉歴史資料館の館長も兼ねておられるためご挨拶文を頂きました。

理事長さんのお家は住吉でも古いお家柄であります。そんなお家でも、古文書や資料類はもう持っておられないとの事。他の古くからのお家でも同じような状況とは思います。それでも地道に資料の探索は続けて行くのが資料館の使命と考えています。

さて、第4号の内容ですが、専門委員の木村先生(神戸大学)には、「住吉村誌を読む」として住吉の裏山である「鼻高山(はなたかやま)」について書いていただきました。恐らく、六甲山の山頂に近い「天狗岩」がそうなのでしょうが、住吉の古い人にお聞きしてもう誰もご存知ではありませんでした。村誌原稿がまとまったのは昭和17年から18年。70年くらい前のことでももうわからなくなっています。

同じく、専門委員の松下先生(同)には、前回に引き続き、「東求女塚古墳と菟原処女伝説」のお話を書いて頂きました。摂津の国うはら郡の野辺にある三つの古墳の位置を正しく描いています。

資料あつめ、資料整理、並びに、聞き取り調査を行っています。今のうちに。そのうち、空や、呉田といつてもわからない人が出て来ます。大阪の住吉はどう違うのか、と聞かれキッとり答えることが出来るようにふるさとに誇りを持ちたいですね。

住吉学園のバックアップを得て、地道に作業を行おうと専門委員の先生方並びに事業推進委員4名で話し合っています。尚、「安政2年の住吉祭(2)」の記事は次号にのせます。

■資料館の開館日は毎週木曜日の午前中です。

また、別途、日曜日は展示室を開館しています。(世話人会の委員の方がお世話)

■資料館の座敷ではお茶会が「菟原茶華道会」主宰で開催されます。

平成24年は3月11日(日)・5月13日(日)・7月8日(日)・9月9日(日)・11月11日(日)の各日曜日です。

平成23年の成果

資料館事業推進委員 内田 雅夫

残っていますが、子供たちにはこれを見るたびに防災の心構えを呼び起こすことでしよう。

住吉歴史資料館は財団法人住吉学園が平成13年3月に開設し、日曜日と木曜日の週2回開館しています。

日曜日は一般の方々に展示室を見て頂いています。木曜日は作業日で、横田富司家に伝わる貴重な文書の整理・紹介を中心に行なっており、当地に在住される方々から聞き取り調査を行っています。神戸大学地域連携センターから先生方を迎えて、資料館専門委員としていろいろご指導を頂いています。

子供たちと防災を考える

平成23年度は、あの、東日本大震災がありました。被災地の速やかなる復興と、被災者の方々の一日も早い正常な暮らしをお祈りしております。

私たちの住吉でも、防災の観点から11月6日に、「防災と私たち展」を資料館で開催、116名の、子供たちとともに、防災への心構えを新たにしました。

昭和13年7月に起った阪神大水害について、貴重な8ミリフィルムによる住吉川の濁流や、当時の写真を展示しました。アンケートでは、「全然知らない」「住吉でも災害があったのだ」との児童の声が寄せられています。旧住吉村が設置した石碑が旧村内に

写真も集まっています。神戸市合併直後から住吉町内を走りだした31系統白鶴美術館行きポンネットバスが住吉をたてに結んでいました。



昭和31年5月12日空区宮入り。ゆかたは今と同じ、右奥に宮入りが終わった吉田区のだんじりが見える。



昭和31年5月12日空区宮入り。ゆかたは今と同じ、右奥に宮入りが終わった吉田区のだんじりが見える。

資料館展示室をもつと見やすく、楽しく、を目指す

昔の生活・仕事の用具も集まっています。

「さとうちぎ」、「さおちぎ」、分銅など、はかりやさおの寄託も受けました。

生活用具を保存する

昔の生活・仕事の用具も集まっています。

開け放たれました。



昭和13年水害直後の住吉駅構内。既に1車線だけが復旧された線路が開通している。住吉川から西を見る。遠くに戦災前の住吉神社の大きな森が見える。

例年、学校お茶会でご指導してもらっているのは兎原茶華道会の方々です。隔月ごとに資料館の座敷と2階ホールで、お茶と生け花展を開催されています。

平成24年の開催日程は、3月11日、5月13日、7月8日、9月9日、そして11月11日の各日曜日です。

どなたでもご参加できます。一度、参加されてはいかがでしょうか。席料は五百円です。

兎原茶華道会お茶会と生け花展

平成24年1月20日、住吉駅平成24年1月20日、住吉駅より西。住吉川はもう見えない。

昭和13年水害直後の住吉駅構内。既に1車線だけが復旧された線路が開通している。住吉川から西を見る。遠くに戦災前の住吉神社の大きな森が見える。

平成24年の開催日程は、3月11日、5月13日、7月8日、9月9日、そして11月11日の各日曜日です。

どなたでもご参加できます。一度、参加されてはいかがでしょうか。席料は五百円です。



東御影線の今
茶屋区
平成24年1月20日

東御影線を走る
白鶴美術館前行き
ボンネットバス
むこうは国道2号線

8ミリ映像として、昭和13年水害の住吉駅付近の惨状を撮影したもののが住吉小学校にて発見されました。これは住吉東町（旧地名）住吉村字反高林（の方）が撮影されていたものです。水害直後にすでに省線電車（JRの電車）がすでに走りだしていたことが映像で確認できます。



空区住吉養老院（現・神戸老人ホーム）前を走る白鶴美術館前ゆきバス

昭和13年7月に起った阪神大水害について、貴重な8ミリフィルムによる住吉川の濁流や、当時の写真を展示しました。アンケートでは、「全然知らない」「住吉でも災害があったのだ」との児童の声が寄せられています。旧住吉村が設置した石碑が旧村内に

写真も集まっています。神戸市合併直後から住吉町内を走りだした31系統白鶴美術館行きポンネットバスが住吉をたてに結んでいました。

昭和31年5月12日空区宮入り。ゆかたは今と同じ、右奥に宮入りが終わった吉田区のだんじりが見える。

昭和31年5月12日宮本西区宮入り。2号線を全速で渡り鳥居に駆け込むところ。雨で荒縄の足袋がどろで汚れている。

また、甲南小学校校庭には創業者で、後に文部大臣を務められた平生鉄二郎校長が子供達を戒めた石碑「常ニ備へヨ」があります。

水害の後、住吉村でも、各地区の少

も提供頂きました。まだ、西区、茶屋区のだんじりは空襲焼失しましたが、よそから借りて引いているのがわかります。

また、甲南小学校校庭には創業者で、後に文部大臣を務められた平生鉄二郎校長が子供達を戒めた石碑「常ニ備へヨ」があります。

水害の後、住吉村でも、各地区の少

も提供頂きました。まだ、西区、茶屋区のだんじりは空襲焼失しましたが、よそ

たは日によつては一貫四～五〇〇文ばかりにものぼることがあります。この賽銭は毎日取り集めて官所の指示を仰いでから(どのように処理するか)取りはからいたりと思つております。以上に述べたように日を追う毎に参詣人が増えていることについて、時々は村役人たちが見廻りをしておりますが、何う怪しいことは一切ございませんので、恐れ多いことですが書面をもつてこの点を申し上げます。どうかよろしくご了承くださいがたく思う次第です。以上。

■五輪塔と村人

この史料によつて、五輪塔の姿がよりはつきりとわかります。その大きさは高さが四五センチ程度の比較的小なもので、作成された時期や作成者、目的などといった刻銘は一切見られないとあります。よほど古いものらしいので、石の表面が風化してしまつたのかもしれません。『住吉村誌』に書かれていた「何病に限らず靈験あらたか」の中身も皮膚に生じるイボや黒あざ、胸や腹の痛み、足の痛みが癒えたというようなより具体的な症例が挙げられています。

塔のある場所は、『住吉村誌』の記述とは異なり「石仏谷」なる「野山」とあります。

ります。この石仏谷がどの谷筋を指すのかはもはやまったくわかりませんが、「鼻高山」に近いかあるいは同じ場所を指していたことは明らかです。この場所は、本来住吉村の村人が農業の合間を見計らつて柴などを刈り取りにやつてくる場所であったことが記されています。つまり村人にとつて五輪塔がたつてあるあたりは、日常的な用益の場であり、ひょっとしたら五輪塔そのものも山に入つてくる村人には常に見知っていたものだったのかもしれません。

そんな塔がある日にわかつ人々の信仰を集めることになつたため、村としては新たな課題を持つことになつたのでした。まず何より、村の用益の場に村内外の衆人が集まるようになることが問題視されたものとおもわれますが、ここで挙げられているのは、事が信仰に関わることから、五輪塔に多くの賽銭が集まるようになつたことでした。当時の錢の価値を今の一〇円とすると、この五輪塔に集まつた賽銭は一日に八〇〇〇円から、多いときで三〇〇〇〇円も集まつたことになります。この賽銭は、とりあえず現在の円に直すのはなかなか単純なことではないのですが、仮に錢一文を今の一〇円とすると、この五輪塔に集まつた賽銭は一日に八〇〇〇円から、多いときで三〇〇〇〇円も集まつたことになります。この賽銭は、とりあえず村役人が日々取り集めて預かっていたものの最終的にこれをどのように処置するかは、もはや村が単独で判断することができなかつたのでした。残念ながらこれ以外に史料が伝わっていない

いため、結果はわかりませんが、当時の村が、きわめて慎重に事にあたつていたことをつかがうことができます。

■「鼻高山」とはどこか？

さて、『住吉村誌』にいう「鼻高山」、文化年間の史料にみえる「石仏谷」とはいつたいどこをさしているのでしょうか。この点に関して、残念ながらこの文章で明確な回答を申し上げることはできないのが現状です。ただ、多少の推測を許していただけるならば、一応以下のようにしておきます。

まず、「鼻高山」ですが、この「鼻高」とは何かといいますと、これは天狗のことにはかりません。現在住吉の西谷山の頂上付近に「天狗岩」とよばれる巨石群があることはよくじられていました。「鼻高山」ですが、この「鼻高」とは何かといいますと、これは天狗のことにはかりません。現在住吉の西谷山の頂上付近に「天狗岩」とよばれていました。「鼻高山」のことをそこそこのことになります。恐らく、石に刻まれた仏像でもあつたか、石仏のようないい岩でもあつたか、何か由来があったとおもわれますが、今となつてはもはやわかりません。

『住吉村誌』が語るよう、残念ながら五輪塔は何者かによって盗難に遭つてしましましたが、少なくとも今から六、七〇年前まで五輪塔のそばに設けられた手水鉢が残されていたといいます。最近、住吉歴史資料館のスタッフメンバーで天狗岩の周辺を実地調査してみましたが、残念ながら手水鉢も石仏も手がかりはまったくつかめませんでした。もしこれが、今日再発見されれば、住吉の歴史を語る証拠物として大変貴重なものとなるでしょう。

もし、「鼻高山」のことや、まだ今でも残っているかもしれない手水鉢のことをご存じの方は、ぜひ住吉歴史資料館までお知らせ下さい。

学校お茶会

資料館事業推進委員 内田 雅夫

住吉歴史資料館では、毎年10月末に住吉の各学校をお招きしお茶会を行つています。平成23年は11月6日に開催しました。

本住吉神社世話人会にはご支援を頂き、また、お茶のご指導は、兎原茶華道会の皆さんのお世話になつてあります。

住吉小学校、住吉中学校、そして渕が森小学校から、合計で116名の児童、生徒、先生方、ご父兄の方のご参加を頂きました。

お茶席となつた座敷が、鳥取の藩主池田公が参勤交代の途中で休憩した由緒ある場所であることを知って歴史を身近に感じ、お茶がおもつたより苦くなかったことに驚き、或いは、きれいな着物を着て、上手にお茶を点てたいと思つた、など感想が寄せられています。

元気な子供たちのスナップ写真をご覧下さい。



渕小お茶会はすすむ。



渕小集合。1回目の方々です。



渕小ご父兄がた。有り難うございました。



渕小校長先生にお手前。



渕小集合(2) たくさんで、2回にわけました。



渕小お茶会すすむ。かけ軸の説明わかったかな?



天狗岩(2011年9月15日)

いますが、この天狗岩が所在する一体のことをかつて「鼻高山」と呼んだのではないかというのが、一応の推測です。『住吉村誌』で谷田さんが「天狗岩」と明記していないことから、当時まだ残つていたとしたいう手水鉢が天狗岩のところにあつたわけではないでしょうが、この岩の近在のどこかにあつたものが、きわめて慎重に事にあたつていたことをつかがうことができます。

『住吉村誌』で谷田さんが「天狗岩」と呼んだとしたいう手水鉢が天狗岩のところにあつたわけではないでしょうが、この岩の近在のどこかにあつたものと考へてよいのではありませんか。一方の「石仏谷」は、もはや消滅した地名(谷名)ですが、さらに古い時代に五輪塔があつた付近のことをそう呼んでいたことになります。恐らく、石に刻まれた仏像でもあつたか、石仏のようないい岩でもあつたか、何か由来があったとおもわれますが、今となつてはもはやわかりません。

『住吉村誌』が語るよう、残念ながら五輪塔は何者かによって盗難に遭つてしましましたが、少なくとも今から六、七〇年前まで五輪塔のそばに設けられた手水鉢が残されていたといいます。最近、住吉歴史資料館のスタッフメンバーで天狗岩の周辺を実地調査してみましたが、残念ながら手水鉢も石仏も手がかりはまったくつかめませんでした。もしこれが、今日再発見されれば、住吉の歴史を語る証拠物として大変貴重なものとなるでしょう。

もし、「鼻高山」のことや、まだ今でも残っているかもしれない手水鉢のことをご存じの方は、ぜひ住吉歴史資料館までお知らせ下さい。

前回は、古代や中世の時代において人々が東求女塚古墳をどのようにとらえていたのかを、『万葉集』や『大和物語』といった文学作品や『源平盛衰記』『太平記』といった軍記物、謡曲を通じて見てまいりました。その結果、もともと『万葉集』の時代では、処女塚古墳を「処女墓」、東西の求女塚を「壮士墓」というぐあいに男女で呼び分けられていた墓の名が、中世になると、いざれも「求塚」と混同して呼ばれ、しかも、それらの墓の場所が生田界隈に当てられるようになりました。その要因としては、女が生田川で入水自殺するという『大和物語』でのモチーフが影響していることを紹介しました。

今回は、江戸時代の人々がこれら三つの「求塚」をどのように認識していたのかという点に迫りたいと思います。江戸時代に刊行される地誌や描かれた絵図を仔細に検討すれば、「求塚」の位置や当時の名称などを明らかにすることができます。

兵庫県立歴史博物館所蔵の「兵庫名所絵図」は、尼崎から明石までに名所旧跡を絵巻仕立てで紹介したも



兵庫県立歴史博物館所蔵「兵庫名所絵図」

のです。寛文十二年（一六七二）以降に成立したものと考えられ、江戸時代の地誌の中では比較的早い例とされています（『兵庫県立歴史博物館館蔵品選集II』一〇〇一年）。この絵巻の中に東求女塚古墳が登場します。それによると、「御影川」（現在の石

それぞれ、東から東求女塚古墳・処女塚古墳・西求女塚古墳をあてているのでしょうか。しかし、もし東の「求塚」が現在の東求女塚古墳を指すのであれば、その位置は「御影川」よりも当然東でないとあいまいです。また東西にないとおかしいのです。また東西の「求塚」の被葬者が、それぞれ「ちぬのますらを」（千沼壮士）と「さきたをとこ」（小竹田壮士）となっていますが、『万葉集』では両者は和泉出身の同一人物を指し、もう一人の男性の主人公菟原壮士（うないおとこ）が見あたりません。しかし、三つの古墳の相対的な位置関係を図で表現したものとしては古いものの一つであり、貴重な資料であるといえましょう。

塚の絵の上には、本歌とは若干違いますが、それぞれ和歌が添えられ、木の枝なびけり きくかこと
塚の上の ちぬのますらお ならなくに
木の枝なびけり きくかこと
塚の上の ちぬおとこにし よるへけらしも
田辺福磨

いにしへの
ささだをのこの 妻こひし
うなひ乙女の おきつきぞこは
福磨

とあります。江戸時代の名所記にはこのように和歌や俳諧を添えるのが特徴となっています。最初の歌は『万葉集』（巻九一八一一番）の「はかのうへの このえなびけり ききし」とちぬをとこにし よりにけらしも」を元にしたものですが、作者は田辺福磨ではなく高橋連虫（まつしやまつしやま）です。このように伝承 자체には古代のものと比べ混乱がみられます。塚と和歌がセットとして伝えられ、処女塚を真ん中に、東求女塚を「ちぬおとこ」の、西求女塚を「ささだをとこ」の墓として、すでに三つの塚は江戸時代の初め頃には名所化していましたことがわかります。

■江戸時代の絵巻にみえる東求女塚古墳

前回は、古代や中世の時代において人々が東求女塚古墳をどのようにとらえていたのかを、『万葉集』や『大和物語』といった文学作品や『源平盛衰記』『太平記』といった軍記物、謡曲を通じて見てまいりました。その結果、もともと『万葉集』の時代では、処女塚古墳を「処女墓」、東西の求女塚を「壮士墓」というぐあいに男女で呼び分けられていた墓の名が、中世になると、いざれも「求塚」と混同して呼ばれ、しかも、それらの墓の場所が生田界隈に当てられるようになりました。その要因としては、女が生田川で入水自殺するという『大和物語』でのモチーフが影響していることを紹介しました。

今回は、江戸時代の人々がこれら三つの「求塚」をどのように認識していたのかという点に迫りたいと思います。江戸時代に刊行される地誌や描かれた絵図を仔細に検討すれば、「求塚」の位置や当時の名称などを明らかにすることができます。

兵庫県立歴史博物館所蔵の「兵庫名所絵図」は、尼崎から明石までに名所旧跡を絵巻仕立てで紹介したも

東求女塚古墳と菟原処女伝承(2)

神戸大学文学部非常勤講師
近大姫路大学教育学部専任講師
住吉歴史資料館専門委員

松下正和



住中お茶を待ちます。



住中集合。雨上がり。



住中集合座敷。



住中お茶会はすむ。



住吉小。男子も来てくれました。



お茶会住吉小学校。朝早くからありがとうございます。



住吉小お茶をたてます。コレデ エーカナア?



住吉小校長先生デビューです。



処女塚古墳にある「田辺福磨の碑」

恋侘ぬ
ちぬのますらお ならなくに
木の枝なびけり きくかこと
塚の上の ちぬおとこにし よるへけらしも
田辺福磨

道経

■江戸時代の地誌にみえる 東求女塚古墳

江戸時代の西摂津地域の地誌のうち早いものとしては、延宝八年（一六八〇）に刊行された『福原鬱鏡』があります。内容は神崎川から須磨の西の境川までの沿道の名所を挿絵と和歌俳諧でごく簡略に紹介したもです。この名所案内は、三三年ぶりに行われた須磨寺の本尊と靈宝の開帳にあわせて作られました。さて、この『福原鬱鏡』では「乙女塚求塚」を「うなひ乙女（菟原処女）」「さゝ田男（小竹田壯士）」「ちぬ男（千沼壮士）」の塚としています。また塚の絵も載つており、中央の「おとめつか」の下に二つの「もとめつか」が描かれています。これも、先に見た『兵庫名所絵図』と同様に菟原壮士のことが見えていません。

また、建武年中に小山田太郎高家が討ち死にし新田義貞がここより落ちたところとの説明もあります。これはおそらく『太平記』の叙述を参考したものと思われます。「乙女塚に生る草もや美人草」、この一句は兵庫の人で通称布屋甚左衛門の溝江重次が『福原鬱鏡』を発行する際に作ったものです。地元の人々にとって乙女塚は美人の眠る墓と思われたのでしょう。現在の処女塚古墳が「乙女塚」と呼ばれるようになります。

「求塚」と表現するのは中世以来の用法で、挿絵も『兵庫名所記』同様にかなり簡略化されています。その点、寛政年間に刊行された、摂津の名所を絵画と文章で紹介した地誌である『摂津名所図会』（巻七）では、三つの塚の説明も更に詳しくなっています。

処女塚 又求女塚とも書す。三箇所にあり。一は住吉川の西、御田村の東、田畔の中にある。塚の巡百五十間許。一は東明村にあり。塚は巡百間許、塚上に松樹二十株あり。一は味泥村の浜手、大石村の間にあり。塚の巡二百間許、これも塚上に松樹あり。東の塚を西面とし、これを茅停男とす。土人鬼塚ともよぶ。西の塚を南面としこれを菟原男とす。中の塚を南面として、求女塚と呼ぶ。相隔つ事各十五町許。：

三つの処女塚（求女塚）を現在の東求女塚古墳・処女塚古墳・西求女塚古墳にあてるだけではなく、塚の周囲の長さや塚上の松の様子までが丁寧に記されています。前ページの図で「求塚」とあるのは東求女塚古墳です。住吉神社より酒蔵が居並ぶ浜辺に南へと向かう道の東側に描かれています。図では前方部と後円部の間にあるくびれ部や墳丘上の松が表現されています。

前ページの図で「求塚」とあるのは東求女塚古墳です。住吉神社より酒蔵が居並ぶ浜辺に南へと向かう道の東側に描かれています。図では前方部と後円部の間にあるくびれ部や墳丘上の松が表現されています。



「摂津名所図会」益荒丁子等妻を互にあらそひ生田川にて水鳥を射る

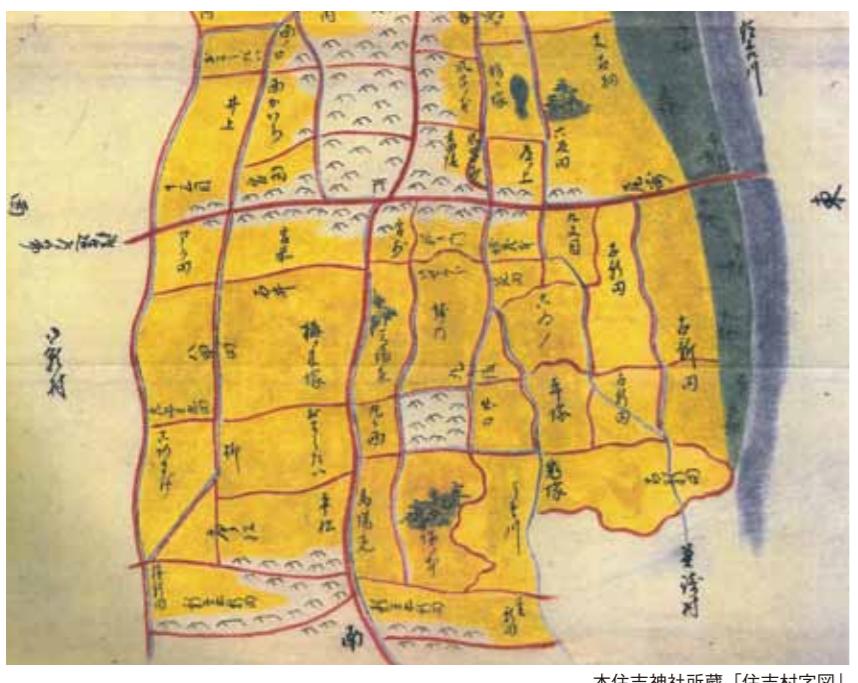
また、東求女塚が「茅停男」（千沼壮士）の墓で、西求女塚が「菟原男」（菟原壮士）の墓にあてがわれています。ながらく千沼壮士と小竹田壮士とが混同されましたが、ここでようやく「菟原男」が登場し、「万葉集」の伝説のあり方が確認されたのでした。

右塚三ツ有、一ツハ生田川東味
一、求女塚又処女とも書乙女塚
おとめ塚ハ女のつか
うなひ乙女と云
もとめ塚ハ二人の男
小竹田男 千努男也

また、東求女塚が「茅停男」（千沼壮士）の墓で、西求女塚が「菟原男」（菟原壮士）の墓にあてがわれています。ながらく千沼壮士と小竹田壮士とが混同されましたが、ここでようやく「菟原男」が登場し、「万葉集」の伝説のあり方が確認されたのでした。

わっていく過程がみてとれます。また、挿絵では三つの塚はすべて「求塚」と表現し、文章では「処女塚」と解説しています。このように近世に入ると、三つの塚を「求塚」とする中世以来の呼称に対し、真ん中の墓を「処女塚」とする用法が発生し、名所案内では全体を「処女（乙女）塚」と一括して説明することになりました。

実はそのことと関連する貴重な絵図が本住吉神社で大切に保管されています。『摂津名所図会』が刊行された同じ寛政年間に描かれた「住吉村字図」がそれです。この絵図によれば、新町の集落（住吉宮町あたり）南側の字「塚ノ本」にある東求女塚古墳を「乙女塚」と記しています。「乙女塚」の東側には「平塚」「鬼塚」の字名がみられ、『摂津名所図会』で里人が「求塚」のことを「鬼塚」とも呼んでいるとの記述も関連しており大変興味深いです。



■村絵図にみえる東求女塚古墳

しかし、一方で挿絵では、二人の「益荒丁子」による妻争いで生田川にて水鳥を射る様子が描かれたり、小山田太郎が求塚にて主君新田義貞のために討ち死にした様子が描かれています。もちろん前者は『大和物語』、後者は『太平記』のモチーフであり、もともと存在していた古代の古墳にさまざま伝承が付け加

『摂津名所図会』の説明で重要な点は、御田村の求塚を「茅停男」（千沼壮士）の墓として明確に位置づけられているとともに、土地の人による求塚の呼び方にについてふれられていることが挙げられます。それによると、住吉の人は東求女塚古墳のことを「鬼塚」とも呼んでいた 것입니다。

実はそのことと関連する貴重な絵図が本住吉神社で大切に保管されています。『摂津名所図会』が刊行された同じ寛政年間に描かれた「住吉村字図」がそれです。この絵図によれば、新町の集落（住吉宮町あたり）南側の字「塚ノ本」にある東求女塚古墳を「乙女塚」と記しています。「乙女塚」の東側には「平塚」「鬼塚」の字名がみられ、『摂津名所図会』で里人が「求塚」のことを「鬼塚」とも呼んでいるとの記述も関連しており大変興味深いです。



処女塚古墳にある「小山田高家の碑」

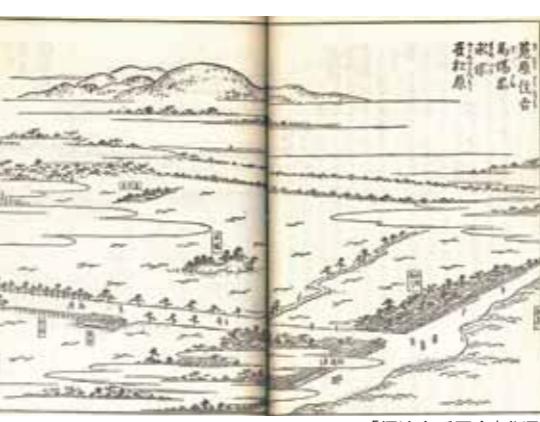
泥村にあり、一ツハ遠明村に有、各十斗をへだつ

とあり、乙女塚と二つの求女塚の場所が明確に記されています。東の求女塚は住吉川の西の御田（吳田）村にあるとしています。植田下省は薬種商をいとなむかたわら摂津や播磨の史跡、名勝などを実地で調査していただけに『摂陽群談』よりは具体的ですが、『兵庫名所記』でも求女塚の一人の男を「小竹田男」「千努男」とし、菟原壮士が登場しない点は、やはり前代の地誌情報を引き継いでいるようです。塚の挿絵も『福原鬱鏡』の三古墳の配置に似ていますが、三つまとめて「もとめつか」とあるだけでかなり簡略化されています。

泥村にあり、一ツハ遠明村に有、各十斗をへだつとおり、乙女塚と二つの求女塚の場所が明確に記されています。東の求女塚は住吉川の西の御田（吳田）村にあるとしています。植田下省は薬種商をいとなむかたわら摂津や播磨の史跡、名勝などを実地で調査していただけに『摂陽群談』よりは具体的ですが、『兵庫名所記』でも求女塚の一人の男を「小竹田男」「千努男」とし、菟原壮士が登場しない点は、やはり前代の地誌情報を引き継いでいるようです。塚の挿絵も『福原鬱鏡』の三古墳の配置に似ていますが、三つまとめて「もとめつか」とあるだけでかなり簡略化されています。



「兵庫名所記」(西島孜哉編「地域文化研究叢書1」より)



「摂津名所図会」求塚

泥村にあり、一ツハ遠明村に有、各十斗をへだつとおり、乙女塚と二つの求女塚の場所が明確に記されています。東の求女塚は住吉川の西の御田（吳田）村にあるとしています。植田下省は薬種商をいとなむかたわら摂津や播磨の史跡、名勝などを実地で調査していただけに『摂陽群談』よりは具体的ですが、『兵庫名所記』でも求女塚の一人の男を「小竹田男」「千努男」とし、菟原壮士が登場しない点は、やはり前代の地誌情報を引き継いでいるようです。塚の挿絵も『福原鬱鏡』の三古墳の配置に似ていますが、三つまとめて「もとめつか」とあるだけでかなり簡略化されています。

泥村にあり、一ツハ遠明村に有、各十斗をへだつとおり、乙女塚と二つの求女塚の場所が明確に記されています。東の求女塚は住吉川の西の御田（吳田）村にあるとしています。植田下省は薬種商をいとなむかたわら摂津や播磨の史跡、名勝などを実地で調査していただけに『摂陽群談』よりは具体的ですが、『兵庫名所記』でも求女塚の一人の男を「小竹田男」「千努男」とし、菟原壮士が登場しない点は、やはり前代の地誌情報を引き継いでいるようです。塚の挿絵も『福原鬱鏡』の三古墳の配置に似ていますが、三つまとめて「もとめつか」とあるだけでかなり簡略化されています。